

今年の待降節第一週、やや離れた所から降誕への道を見つめよう。降誕の奇跡は、預言者には未来であり、生前のイエスを知らなかったパウロにとっては過去。だからといって、21世紀の私たちがそうであるように、時の隔たりは必ずしもマイナスではない。むしろ使信を純度高く見ることができる。

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた(イザヤ 9:5a)。「みどりご」が一人生まれたからといって、何になるのか。待ち望む平和が到来する。

「地を踏み鳴らした兵士の靴、血にまみれた軍服はことごとく火に投げ込まれ、焼き尽くされた(9:4)」。だから、みどりごは「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君(9:5b)」と名づけられた。この預言の背景に、アッシリアに滅ぼされた北王国が透けて見える。

預言はそれゆえの、平和への切なる祈り。こんな中に「ひとりのみどりご」が生まれ、「平和の君」という名のごとく平和を実現させる。

イエスから遡る700年の昔、すでに降誕の予型があった。イエスの誕生は、唐突な出来事なのではなく、預言者イザヤがその源流を告げていた。

「力ある神、永遠の父(9:5b)」と唱えられるその「驚くべき指導者(9:5b)」は、一人の「みどりご」として生まれた。父なる神は、高い天に鎮座ましましてはおられない。

争い絶えないこの地上に、御自身が傷つくことを厭わず、人間として現れる方なのだ。

戦闘状態ではない私たちの暮らしに、「平和の君」がどういう意味をもつのか。「彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を、あなたはミディアンの日のように、折ってくださった(9:3)」。

軛、杖、鞭とは何の比喩か。国々や社会、様々な世間で、日常的に起っているサタンの陰険さや暴力か。あるいは、一人ひとりが抱え込んでいる罪か、それとも逃れようのない死の力だろうか。

どれもこれも、皆当てはまっているんじゃないか。そんな「軛、杖、鞭」を、「わたしたちのために生まれたひとりのみどりご(9:5a)」が折ってくださる(9:3)。

それゆえ私たちは、「永遠の父(9:5b)」の懐に憩いうる。

預言者はこうした神の介入を、コントラストの強い光と闇で語る。「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた(9:1)」。みどりごは、まさしく闇の中の光。逃れようのない死の陰に囚われた者の輝きなのだ。

イエス以前、みどりごの救いはこのように到来していた。

「時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになった(ガラテヤ 4:4)」。確かに女から、人間としてこの地上に、イエスはお生れになった。

「わたしたちも未成年であったときは、世を支配する諸霊に奴隷として仕えていた(4:3)」。「世を支配する諸霊」とは何か。原意は星辰の運行になぞらえられる「stoixeia / 宇宙の理」。禍々しい悪霊の類ではない。生きて死んでいく生命の理、狭く解すれば人間を律し同時に抑圧する規範か。

私たちはこの諸霊(stoixeia)の支配下に生まれたけれども、そこから贖い出されて「神の子」とされる(4:5)、未来が約束されている。

なんと「わたしたちを神の子となさる(4:5)」。弟子の末席くらいなら分るが、俺が神の子だなんて厚顔に過ぎないか、とキリスト者の誰もが思うだろう。そうだ、誰だってそんな器ではない。が、私たちは御子の霊に吹かれて「アッバ、父よ(4:6)」と叫ぶ。あの「みどりご」が私に宿っているから。



《おまけのひとこと》

神をおとうちゃんと呼ぼう 聖霊が私を吹き抜け みどりごが私に宿っている この児が おとうちゃんと呼ぶ 天高くにおられる神ではない 手を延ばせば届く所におられる 私たちの本当の父